地域クリエーターの履歴書

『企業の将来はトップで99%が決まる』(船井幸雄)と言われるが、
その企業体と同様に、地域にも組織を導くリーダーが存在する。
あふれる情熱と哲学をもって、地域活性化を挑む
地域クリエーターの本質に迫る！

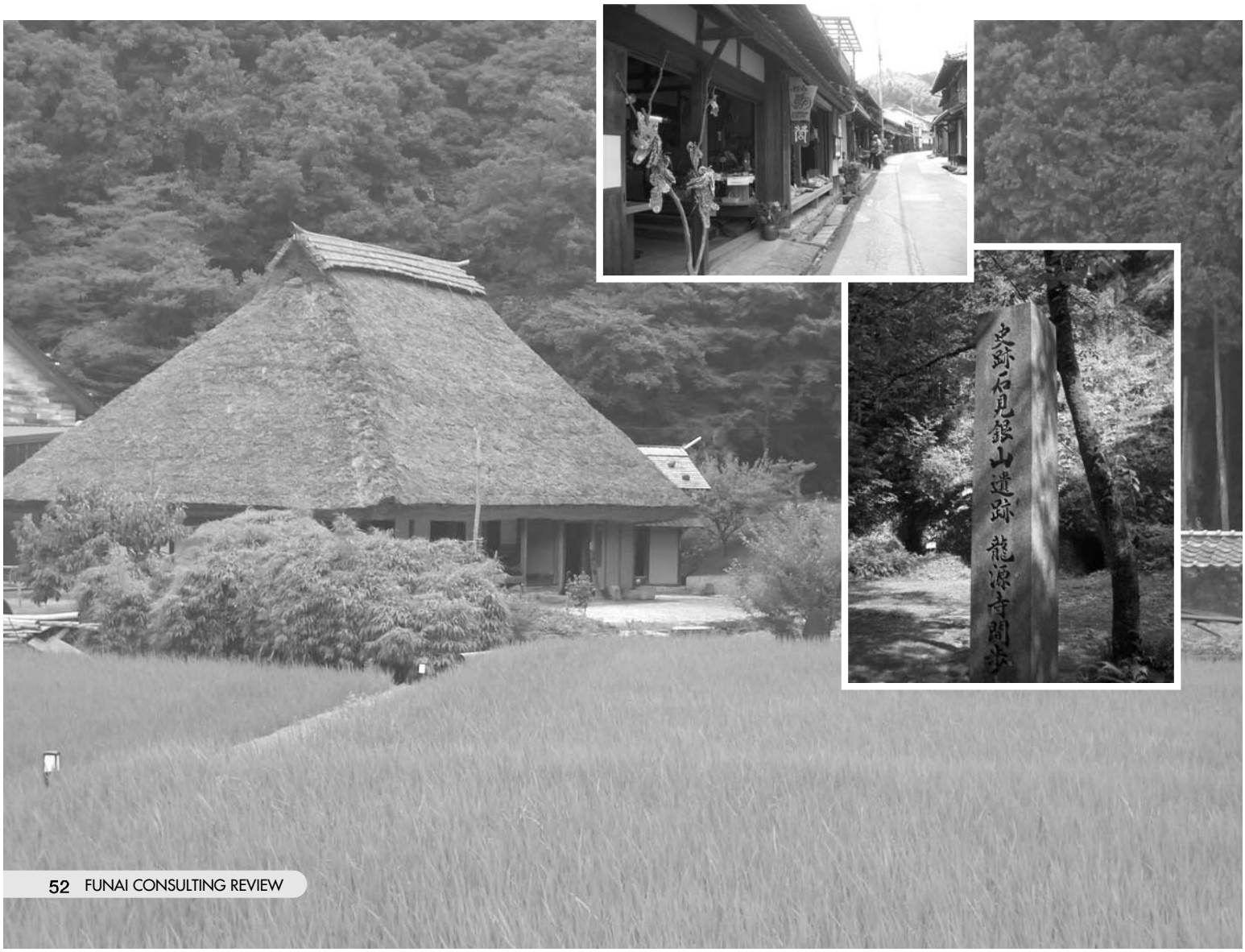
地域クリエーターの探究家
栃尾 圭亮(とちお・けいすけ)
船井総研入社後、地域創造・活性化チームに志願し、創設に情熱を注ぐ。現在は、地域再生行脚100を実践し、成功事例を求めて全国を渡り歩く。
連絡先：keisuketochio@funaisoken.co.jp

松場 登美

石見銀山生活文化研究所 所長
内閣府 観光カリスマ
TOMI MATSUBA

島根県大田市大森町

持続可能なまちおこしとは



島根県大田市大森町石見銀山、2000年に世界遺産に暫定指定されたこの地域は、知床の世界遺産指定を受けて、日本における世界遺産の有力な候補地として注目されている。

しかし多くの世界遺産が圧倒的に有名な観光名所を持つのに対し、石見銀山の魅力は少々異なっている。同地域の魅力とは、銀山や城下町単体にあるのではなく、町を構成する一つ一つの家や寺、そのなかに存在するちょっとした風景など小さなこだわりの重なりにあると言われる。

今回、焦点をあてるクリエーターはこの石見銀山において20年近くにわたりそういった小さな試みを続けて、現在の石見銀山を築いた人物の一人、群言堂取締役所長の松場登美（まつば　とみ）氏である。群言堂という社名が示すとおり、松場氏の目指すところは、圧倒的な存在感を持つ“一言”ではなく、小さな魅力が重なることによって織り成される“群言”である。

今回の“履歴書”では、同氏のリーダーシップと共に、そのまちおこしがめざす“持続可能なまち”の素顔に迫る。

CREATER'S PROFILE No.7

氏名
まつば　とみ
松場 登美

職業
石見銀山生活文化研
内閣府・観光カリス

出身地
三重県安芸郡芸濃

地域クリエーターの履歴書

年代	出来事
1949	芸濃町に生まれる
1981	夫である松場大吉の故郷 石見銀山に帰郷
1989	築150年の古民家を修復し「ブラハウス」をオープン
1993	女性のためのフォーラム「鄙のひな祭り」を開催（2003年まで）
1996	国土交通省・地域アドバイザーに就任
1998	石見銀山生活文化研究所 設立 所長に就任
2003	NPO法人「納川の会」発足 理事就任 内閣府　観光カリスマに任命される

「鄙のひな祭り」とは、松場氏の呼びかけによって、1993年から10年間にわたり開催された、地域の女性の情報交換に焦点をあてたイベントである。昼間はディスカッションを、夜には大宴会が開かれ、地域の女性の意識改革につながった。

自分が変わることが全てのはじまり！！

20年にわたり地道なまちづくり活動を続けてきた松場氏。その施策は、自らが暮らす町をほめながら町を練り歩く活動に始まり、まちの女性のための運動「鄙のひな祭り」へと続いていく。しかし、長い歴史や慣習を持つ人々のなかでどのように彼らの価値観を変え、活動を継続させたのか。そこには、人を説得する、というよりも、自分が変わることによって人に影響を与えていく、という人への姿勢があった。

栃尾 現在、石見銀山は松場さんをはじめとしたクリエーター達の思いが詰まった町になろうとしています。しかし石見銀山では最初からまちの意思が一つだったのでしょうか。できれば、活動のきっかけを含めてお聞かせ下さい。

松場氏 いいえ残念ながら、私たちのまちでも多くの反対、そして無関心がありましたし、今でもそれらが完全になくなったとは思いません。

少し私たちの活動のきっかけについてお話しすると、実は最初から壮大なまちおこしへの思いがあったわけではありません。そこには、ただ「私たちが住みたいと思える町にする」という、私たちがこのまちで生きていくために必要な環境を整えたいという切実な思いがありました。

私たちの活動のきっかけは、1991年に行ったまちの良いところを話しながら町を練り歩く活動に遡ります。この活動は嬬恋（つまごい）の行政官の方のまちおこしに関する講演で「よそものである私がまちをかえていくために、私自身がまちのことが大好きであることを宣言して回る必要があった」というエピソードにヒントを得て、実際に私たちが動き成功した最初の活動です。

しかし、もちろん全ての活動がうまくいっていたわけではありません。例えば、「鄙のひな祭り」は合計10年間継続され、最終年には大森町だけではなく、他の町からも多くのボランティアが集合して盛況のうちに幕を閉じました。しかし、この活動も当初はまちの人の賛同は得られず、ほとんど外部の参加者だけでした。

栃尾 そのような無関心、もしくは反対の中でどのようにしてまちの人を巻き込んでいったでしょうか。そのコツがあれば、お教え下さい。

松場氏 コツはありません。説得のようなこともほとんどしていないと思います。反対に、目立つ活動をすることで地域の人による悪いうわさはどうしても耳に入ってきます。しかしできるだけそのことには心を砕かないようにしました。また活動への参加を促すようなこともあまりしていません。

ただ、私が心がけたことを挙げるとすれば、それは“私自身が変わること”でした。人を説得して変えることは非常に

難しいことです。しかし、自分を変えていき、それによって人に影響を与えることは可能です。ですから、私はまず行動を起こし、それを継続してつづけることで自分を変えようと心がけました。もし現在の活動にまちの人々が参加してくれているとするならば、おそらく私がいくばくか変わった結果、人がついてきてくれるようになったのだと思います。

継続の秘訣は“縁側”方式にあり！！

地道に活動を継続することで、徐々に地域に影響を与えてきた松場氏。しかし多くの反対や無関心の中でいかにして活動を継続してきたのであろうか。そこには、力を抜きながら走り続けるという簡単に見えて難しい生き方があった。このやり方は、あえて境界をつくらず内と外の曖昧な部分を残す方式、日本の伝統建築“縁側”にも通じる。

栃尾 活動を継続することで、自分を変え、人を変えていく。しかし多くの無関心や反対の中での活動を継続するには大きな困難があったかと思います。実際の活動ではどのような心がけが必要であったのでしょうか。

松場氏 それは、常に100%を目指すのではなく、“あえて力を抜きながら走り続けること”です。完全に100%を目指して活動をすることは、高い完成度の代償として多くの人に無理を強いることになります。例えば、“草木染め”は純粋な自然物と考えられていますが、煤染剤を使用する際、100%自然とは言いきれなくなる場合があります。これは一例ですが、100%を目指す活動はある一定の人が非常に高い意義・満足度を感じる一方、同時に大きなコストやリスクを背負っている人がいる、というケースが多いことを忘れてはなりません。

ですから私は、あえて100%を目指さず、しかし成果を生み出す活動を行おうとしてきました。日本の家屋には、家の外側としての機能と内側としての機能を併せ持つ“縁側”があります。縁側は考え方によって、内にも外にもなります。私たちは、自分の活動においてもそういう曖昧なゾーンをあえてつくろうとしたのです。このある一定の境界を引かない曖昧さを残して不満・不平をどうにか吸収したことが、私たちの活動が継続した秘訣と言えるかもしれません。

100%を目指すことは、難しいようですが目標が定まっている分簡単なことです。そうではなく、私たちの活動はあえて曖昧な部分を残し、なおかつ活動の意義を残す、という方式をとっています。もしかすると、ある意味ではこの力を抜きながら走り続けるという生き方は非常に難しいかもしれませんね。

まちに息づく群言の魅力！！

活動を継続することで、自分を変え人に影響を与える。現在の石見銀山の姿からは、この試みは一定の成果をおさめているといえる。では、松場氏が目指す“変わるべき人”というコンセプトはどんなものなのだろうか。

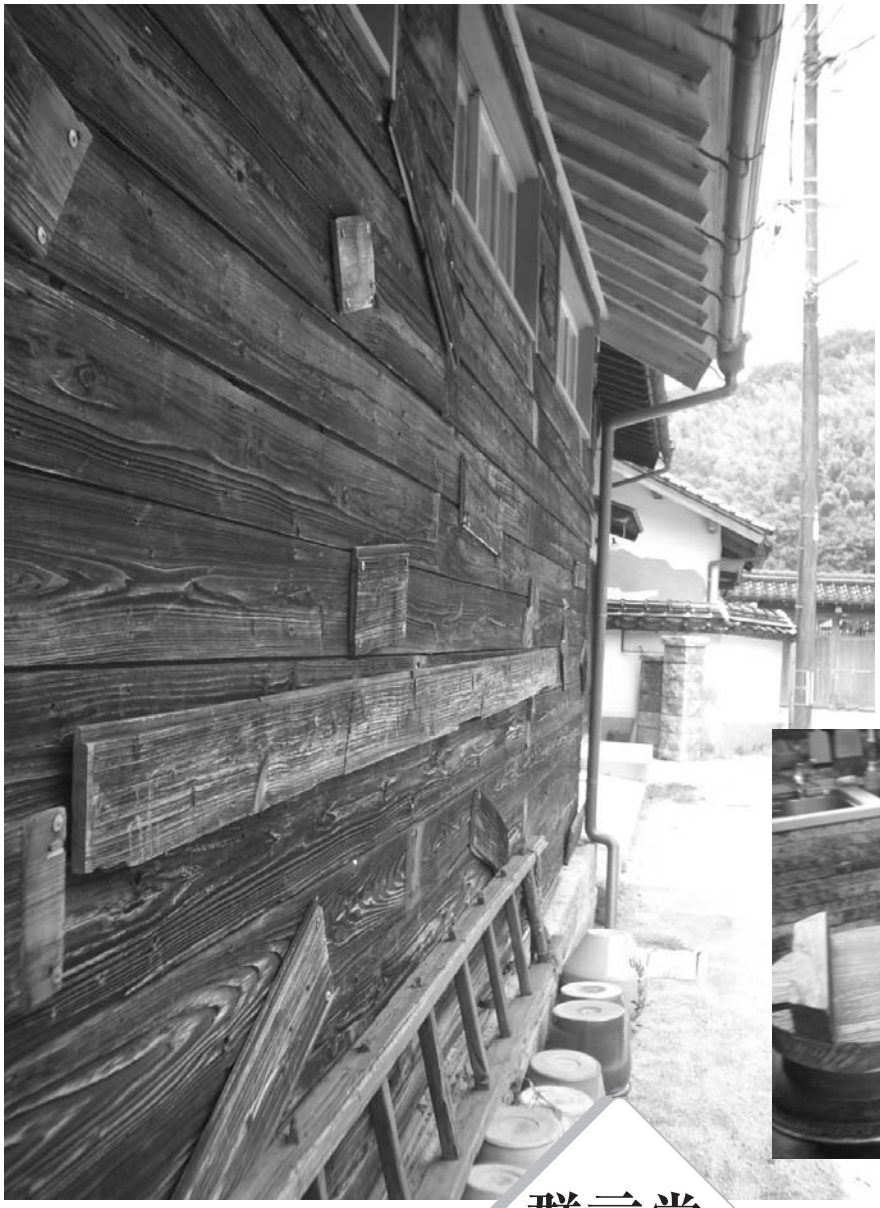
松場氏が目指すコンセプト、それはまちの魅力である“群言”に重なる“無我”にあるという。前述したように、石見銀山の強さは、ある一点の観光施設や名産物にあるのではなく、その風景や雰囲気に織り込まれた一つ一つのストーリーにある。これはある意味、強き者が発する圧倒的な“一言”に対する、一人一人のつぶやきの集合“群言”の魅力である。松場氏の目指すべき姿は、まちの目指す姿に重なっていく。

栃尾 松場さんが目指す人物とは、どのようなコンセプトに根ざした人なのでしょうか。

松場氏 それは言ってみれば、“無我の境地”を目指す人、とでも言うのでしょうか。そもそも私たちが住みたいと思う町、それは私たちの利益だけが全面におしだされるまちではありません。むしろ今だけではなく将来も多くの人たちが夢を実現できるステージとして選んでくれるまちです。そのた

銀山で亡くなった人々と先祖の霊を供養するために作られた羅漢寺にある五百羅漢。

（左）銀山坑道の入口。こうした採掘の名残は数多く残っている。観光ルートとは別に、現在、発掘作業を行っている場所もある。（右）銀山の採掘場所一帯は、緑あふれる散策コースになっている。



群言堂

蔵や廃校になった小学校などの廃材を利用して建てられた群言堂は、ギャラリーやカフェ、イベントホールなどを持つ。普段の暮らしの中で、身近に文化を感じ、楽しむことができる。

『群言』とは？

説得された集まりでなく、共感した仲間が各々、まちに足跡を残す。

めには、私たちはできだけ我欲を抑えもっと大きな魅力を作るために動かなければなりません。私たちは全面にでて特産品や人工の観光名所をつくるつもりはありません。それよりも地域に眠る自然や雰囲気の良さを大切に守り育てていけば良いのだと思います。

ひきよせて　むすべば柴の　庵にて
　とくればもとの　野はらなりけり　（慈円）

という歌があります。私たちもこの歌のように生きられればと思います。

栃尾 その考え方が、現在のまちにも活かされているのでしょうか。

松場氏 そうであって欲しいと思っています。歩いて回っていただければお分かりになるように、石見銀山にはこれといった特産品やいわゆる日光の東照宮や京都・奈良の観光名所のようなものはほとんどありません。しかし、この土地を訪れてくれる多くのリピーターはその自然や風景、雰囲気に魅力を感じてくれています。中には、自分の夢を実現するフィールドとしてこのまちを選び住み着いてくれる人々もいます。私たちが目指すまち、それは現在だけにとどまらない、将来にわたっても魅力ののこる自然体のまちなのです。

まちづくり、というと観光名所の振興、特産品の育成などが注目される。もちろん、これらも立派なまちおこしではある。しかし残念なことに、それらの一部が一過性のものに終わってしまうことも事実である。実際、多くの成功事例が世代交代を経験し、まちおこしの次のステージで“第二のつまづき”を経験する。この意味で、“我”をなくし、古き良きものを一つ一つ形成する“群言”の姿勢は持続可能なまちおこしの典型といえる。

今後の石見銀山、それは復活した古き良きものの一つ一つが言葉を発し、様々な可能性を開花させる、そんな土地になるのではないだろうか。

特別な観光名所に頼るわけではなく「普通」のまま、まちが活性化していく。